

# 人間と環境との関わりについて

——「住む」ことをめぐって——

\*川 崎 惣 一

On Relation between Human and Environment — Several issues concerning “Dwelling”.

KAWASAKI Soichi

## 要 旨

人間と環境との関わりを問い直すにあたって、本論では「住む」ことに関するさまざまな論点の洗い出しを試みる。動物が本能に縛られており環境との関わり方が固定されているのに対して、人間はそうした束縛から解放された仕方  
で存在しているが故に、「住む」ことにおいて優れていると言える。人間は「住む」とき、「住まい」を作る。「住まい」  
とは環境のなかに構築された自らの固有の空間であり、これによって人間は安全や安心、快適さなどを実現させよう  
とする。「住まい」は人間が生を営む上での拠点として、人間学的な意味を持っている。さらに、「住む」ことに内在  
する時間性故に、人間はこの「住まい」に対して独特な感情的つながりを抱く。「住まい」はそれじたいのなかに文  
化や歴史を沈殿させており、「住む」人間の振る舞いを規定する。「住まい」は人間と環境との媒介としての技術の所  
産である。技術は、人間が環境に適応することを可能としたが、それ自体が「住まい」という人間にとって新たな環  
境を作り出す。技術は快適さばかりでなく、「善く生きる」を実現させることもでき、この点において技術は倫理的  
な次元へと接続している。

Key words：環境、住むこと、技術

## 0. はじめに

現代を生きる我々にとって、人間と環境との関わり  
について深く問い直すということが喫緊の課題になっ  
ている。前世紀以後、いわゆる環境問題が地球規模の  
重大な問題として広く共有されるようになってきてい  
る。気候変動・地球温暖化の問題、エネルギー問題、  
食料問題など、人類が現在直面している様々な危機に  
対応していくためには、もはや表層的・技術的な方策  
によって対応するのでは不十分であり、むしろ根本的  
な対応、つまり、人類が自明なものとしてその恩恵を  
享受している文明の根本性格そのものを問い直すこと

が必要不可欠なのではないか、とは、多くの論者が指  
摘するところである。このことから我々は、我々の自  
然観や人間観そのものを問い直すよう迫られていると  
言える。<sup>1</sup>

こうした問題意識のもとに、人間と環境との関わり  
について哲学的に問い直そうとすると、いったいど  
のようなアプローチが考えられるだろうか。

まず押さえておくべきことは、人間と環境との間に  
は相互作用の関係があることである。三木清は『哲学  
入門』のなかで、その相互作用を以下のように簡潔に  
まとめている。

---

\* 宮城教育大学社会科教育講座

「人間と環境とは、人間は環境から働きかけられ逆に人間が環境に働きかけるといふ関係に立つてゐる。我々は我々の住む土地、そこに分布された動植物、太陽、水、空気等から絶えず影響される。人間は環境から作られるのである。他方我々はその土地を耕し、その植物を栽培し、動物を飼育し、或ひは河に堤防を築き、山にトンネルを通ずる。人間が環境を作るのである。即ち人間と環境とは、人間は環境から作られ逆に人間が環境を作るという関係に立つてゐる」(三木 (1967a, p. 10))。

人間と環境との関わりについては、まずはこのような洞察が出発点となるだろう。むろん、ユクスキュルの「環世界 (Umwelt)」(ユクスキュル／クリサート (2005)) という概念がはっきりと示しているように、環境という概念が原理上そのなかに生きる生命体を前提として成立しているのだから、人間と環境との関わりということで問題になっている環境とは「人間にとっての環境」のことに他ならず、そうした意味での環境と人間とが互いに影響を及ぼし合う仕方で密接に関わっているということは、当然のことである。次なる問題は、こうした洞察をどのような方向へと展開してゆくかである。多様な論点がありうるが、本論は、まずは人間の「生」の一つの根本形態としての「住む」に焦点を合わせることで、人間と環境との関わりについて考えてみたい。というのも、人間と環境との関わりについて考えるには、人間が営んでいる「生」の具体的な様態から目を離すことはふさわしくない、と考えるからであり、さらに、先に引用した三木の文章にも表れているように、人間が環境のなかに在るとはまさしく「住む」ということに他ならないからである。「住む」というのは人間にとって根本的な存在様態であり、またこのことは、人間が、客観的な意味で空間内のある一点に存在しているのではなく、環境にいわば内属する仕方で切り離しがたく結びついているという仕方で在るという事実を示していると言える。

さらに、「住む」に注目することは、人間が生を営むという際の人間固有の意味での空間性と時間性という

二つの性格を考察する上で、非常に適していると考えられる。というのも、「住む」とはどこかに住むということであり、かつ、後述するように、一定の期間、持続的にとどまるということだからである。

ただし言うまでもなく、人間が実際に世界のなかで生を営む仕方を考えるならば、「住む」ことだけですべてを説明し尽くすことができるなどということはない。生命の維持という観点からすれば、たとえば衣食住という言葉が示す通り、「住む」以外にも、生きるためには食べなければならないし、衣服も必要であろう。もちろんこれ以外にも、考えなければならない要素は数多い。したがってその意味では、本論が光を当てるのは生の具体的な様態のほんの一面に過ぎないことを、あらかじめお断りしておきたい。

## 1. 「住む」ための空間としての「住まい」

人間は環境のなかに「住む」動物である。では、「住む」とはどういうことなのか。まずはこれについて考えてみよう。動物は環境のなかに「住んでいる」のだろうか。「特定の場所にねぐらを設け、そこを中心として生存している」という意味においてならば、動物と人間に大きな違いはないと言えそうである。動物もまた巣やねぐらを作る。魚や昆虫でさえも巣を作る。「住みか」というのを縄張り、さらには活動のテリトリーという意味にまで拡張して理解するならば、「住む」ことをしない生物の方が珍しいとさえ言えるかもしれない。

にもかかわらず本論では、「住む」ことができるのは人間だけだ、という前提で論を進めたい。動物や昆虫などの生物にはねぐらや巣を作るものが多くいるし、それらのものはねぐらや巣など一定の場所に「住んでいる」と見なすこともできるのでは、と思われるかもしれない。しかしそれは、あくまで人間との類比において、比喩的な意味でそう言えるのに過ぎない。というのも、動物や生物は、意図的ないし計画的にそのようにしているわけではなく、あくまで種の本能に促される仕方でそこを自らの生存上の拠点としているに過ぎないからである。したがって、動物は環境との関わ

1 筆者は、こうした時代の流れに即した仕方で哲学の新たな分野としての「環境哲学」を構想する必要を痛感し、それがとりうる方向性について模索してきた。本論は、これらの試みを引き継ぎ、より具体的な場面で展開させることを目指した試論という性格を持っている。cf. 川崎 (2010) および川崎 (2012)。

り方が本能にしたがって固定されていると見なすことができる。

これに対して、人間はどこに、どのような仕方で「住む」かを自らの意志で選ぶことができる。それは事実上というより権利上のことであり、そのような能力が備わっている、ということの意味する。むろん、物理的な制約というものがあるが、原理上、その選択肢は無限にある。これに対して動物その他の生物は本能によって定められたプログラムにのっとって巣を作るに過ぎず、巣にバリエーションがあるとしてもそれは任意で選択されたものではない。シェーラーの説明を借りるならば、動物にとっての環境世界は動物の有する生理学的な特性や、その衝動インパルスおよび感覚の構造が有する一定の枠内にとどまるという意味で、両者は「閉鎖的」に適合しているのに対して、人間は「精神」を有する存在者であることによって、行動の衝動インパルスからは自由であり、環境世界の感性的な外的側面から独立であるが故に、人間の行動は環境世界の桎梏から脱却しているという意味で「世界開放性」という形式を有しているのだ（シェーラー(2002, pp.49-50)）。

人間は世界のなかに「住む」。それは、必然的に、一定の空間を占めるということであるが、さらに「住む」ことには固有の様態がある。これに関して、「住む」と「在る」とを比較してみよう。「在る」というのは客観的な仕方で空間のある一点に存在する、ということの意味しており、これは特定の事物が時間の流れのなかで消滅することなく存在し続けていることを含意しているが、それが存在している場所とのつながりには触れていない。「住む」というのは、移動することが可能であり、実際にそのつど移動してはいるのだが、活動の中心ないし拠点として、持続的に一つの場所にとどまるということの意味している。それは客観的に見て長い時間をその場所で過ごしているというよりは、習慣的・定期的にその場所に立ち戻り、切り離しがたく特定の場所と結びついているということであり、さら

にまた、その場所にいることによって安全なり安らぎなりを手に入れていることが含意されている。したがって、「住む」ことは行為ではあるが、同時に状態でもあり、そのつどの単独の行為とは異なって、一定の持続性を保持することを含意している。つまりそれは、場所との何らかの結びつきを保持しつつ、独特の仕方とどまるということなのだ。

以上のような意味において、人間は「住む」において優れている、とすることができるだろう。<sup>2</sup>そして人間は「住む」とき、自らの選んだ場所に「住まい」を設ける。無論、必ずそうするというわけではなく、「住まい」を持たないケースというのもあり得る。未開の地に暮らす狩猟民族のように、獲物を追いかけてながら放浪の旅を続ける場合がそうであろうし、あるいは松尾芭蕉が『奥の細道』序文の冒頭近くで記したように、「舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす」ということも充分にあり得ることである。しかし、そうしたケースは、少なくとも現代の日本において、かなり例外的であろう。<sup>3</sup>

ところで、人間が「住まい」を作ることの目的は様々である。一つには、「身を守る」という目的がある。ここには、雨や風などの気候から身を守る、食料を蓄えることによって飢えをしのぐ、さらには外敵から身を守る等々が含まれる。つまり、安全性ということだ。そこには、「安心を得る」という目的も含まれるだろう。あるいはさらに、「快適さを求める」という目的もあるだろう。自分にとって居心地のよい場所を作る、ということには、安全・安心というのにも含まれていると考えられる。人が「住まい」を作るということ、これは安全・安心・快適さなど、人間が生きていく上で必要としているものを確保するということでもある。

このことと関連して、「住む」とはまた、自分のテリトリーを構築することでもある。別の言い方をすれば、「住む」とは「占有（appropriation）」、つまり特定の場所をおのれ固有の（propre）ものとするという態度で

2 さらに言えば、人間は世界のなかに在るという自らの存在様態について問いを立て、さらに存在の意味を問うことができる。まさにその意味において、人間は「世界に対して開かれている」のだが、これに対して動物はそうではない。このことからハイデッガーは、動物が「世界貧乏的（weltarm）」であると述べている（ハイデッガー(1998)）。

3 この点に関して、現代社会においては「住む」ための家があるということが社会生活を送る際の前提条件になっている一方で、世界全体に目を向ければ、伝統的に非定住という仕方で生を営んでいる人々もあり、あるいは、非定住の生活を余儀なくされているという人々がいるということも本当である。こうしたケースについては、本論は考慮しきれていないことをお断りしておきたい。

もある。特定の場所を占めるということは、必然的に、他者たちを排除し、私的な空間を確保することでもあるのだ。

ただし、「占有」というのが単なる空間的な意味合いにとどまるのであれば、それは人間固有の態度ではなく、動物一般に広く共有されている態度であると言える。動物もまた、「住む」とことと自らのテリトリーの設定は一体をなしているからである。たとえば動物も、「自分のもの」という証を周囲に刻印する習性がある。マーキングや、いわゆる縄張りを持つことといったものがそうである。これは同種の動物の他の個体を排除することによって、食料の安定的な確保や、繁殖行動のための場所の確保等を目的としているようだ。これに対して人間の「住まい」は、たとえば私有財産の所有や、その場所での活動の優先権ないし独占の確保といった意味合いだけでなく、人間が世界のなかに在ることそのものと密接に結びついており、自らの「住まい」あるいはそれが位置する場所・土地というのが、個人のアイデンティティそのものと緊密に結びついている。それはたとえば、「自分（たち）の土地を守る」という言い回しが、単に私有財産を守ること以上の意味を持っていることにも表れている。土地を奪われ、「住まい」を失うことは、自分にとってかけがえのないものを失うことに他ならないのだ。「住む」とことはこのような意味において自らに属する空間の確保と密接に結びついているのであり、「住まい」はそうした結びつきのいわばシンボリック表現なのである。<sup>4</sup>

では、「住まい」が人間に何をもたらしてくれるものとは何だろうか。「住まい」を作る・建てるのが環境において持つ意味を考えてみよう。「住まい」は、人間と環境との関わりの様式の具体的な表現と見なすこ

とができる。まずは立地の問題、どういう場所に建てるかが重大な問題になる。山や川、森林のそばであるとか、平地あるいは小高い場所にある等々の点は、人間の生活のありようや、安全性（外敵から身を守る等）を色濃く反映している。むろんそこには、気候に対する防御策も関係している。気温、湿度、採光・日当たり、風通しなども十分に考慮に入れなければならない。さらに、「住まい」のデザイン、素材も重要である。そこには、技術による裏付けもかかわってくる。実現可能なデザイン、加工可能な材料と、そうではないものの区別があるからだ。

「住まい」は、そこに住まう人間にとっての生活空間を作り出している。「住まい」の構成要素、たとえば部屋の大きさと配置、天井の高さ、生活の動線の設定なども含めて、さまざまな要素が合わさることで、「居心地」が変わってくる。団らんを楽しみ、くつろぐための部屋を「居間」、英語だと「living room」と称するが、これらの呼び名が示すように、家はそこに留まり、くつろいだ生活を営む空間である。そこには、単に寝泊まりだけを目的とした空間という以上の意味、快適さ、落ち着き、解放感、安心感といったニュアンスが込められている。

近代を代表する建築家ル・コルビュジエの「一つの家屋は一つの住むための機械である（Une maison est une machine à habiter）」（ル・コルビュジエ（1967, p. 85））という言葉はよく知られているが、「住むための機械」という言葉を文字通りにとって、「住まい」をその目的という点で徹底させようとするなら、快適さやくつろぎは後回しにして、生活する上で最低限そろっていなければならない要素に特化した「住まい」を建てることも可能ではあろう。<sup>5</sup> しかし、「住む」とこと

4 この点に関連して、たとえばノルベルグ＝シュルツは、人間は自らの経験する世界の構造を「現実の世界像として表現するために空間を創造してきた」と述べ、そのような空間を「表現的空間あるいは芸術的空間」と呼んだ上で、次のように記している。「ある意味では設営地を作り生活するために環境の中に一つの場所を選択しようとする者はだれでも、表現的空間の創造者である。そのときの彼は、環境を自己の目的に同化すると同時に、環境から与えられる諸条件に対して調節を行ない、それによって自己の環境に意味をもたせているのである」（ノルベルグ＝シュルツ（1973, pp. 21-22））。

5 芦原は、マルセイユにあるル・コルビュジエの有名な高層住宅「ユニテ・ダビタシオン」を訪問した際の印象として、そのデザインの美しさに反して、コルビュジエは居住性をそれほど気にしていなかったのでは、という印象を記している。実際、「その住人に感想を聞くと、いかに住みにくいかを次々とまくしたてるのであった」。芦原は他に、ル・コルビュジエのもとで学んだ日本人から伝え聞いた話として、ル・コルビュジエが設計には非常に熱心だったが、現場に行くのはあまり好まなかった、と記している（芦原（2001, pp. 251-257））。これらのエピソードからはっきりした結論を導き出すのは早計というものであろうが、「住まい」の目的とは何かについて、改めて考えさせられるエピソードではあるだろう。バウハウスの時代以降、たとえばル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエなどに代表されるモダニズム建築の時代には、コンクリートを使った、幾何学的でモダンなデザインが打ち出された。直線で囲まれたデザインは、コンクリート、ガラスという材料が可能にしたものである。こうしたモダニズム建築が、その革新性とは裏腹に、居住性という点でやや難があったことは、ブラジルの首都である人工都市ブラジリア（設計はル・コルビュジエの影響を強く受けたルシオ・コスタ）の例がよく示すところである。

は寝泊まりする場所という以上の意味があるはずだ。

ボルノウは「住まい」の持つこうした意味合いを、「家屋の人間学的機能」と呼び、それを以下のように説明している。

「人間が世界のなかで自己を保持し、そこで自己の課題を果たすことができるためには、人間は、外部世界のとの戦いに疲れはてたときに、いつでもそこへ退き、そこで緊張をとき、ふたたび自己自身へともどることのできる、やすらぎと平安の空間を必要とするのである」(ボルノウ (1978, p. 130))。

したがってボルノウによれば、「住まい」を持つということは人間の本質的な規定そのものなのである。

「住まう者としてだけ、家屋を所有している場合にだけ、そのような、公共から分離された『私的な』領域を意のままに処理できる場合にだけ、人間はその本質を充足することができ、全面的に人間でありうるのである。人間は、そもそも生きていくことができるためには、このようなやすらぎの領域を必要とする。人間からその家屋をとりあげるならば、——あるいはもっと慎重に言ってその住居の平安をとりあげるならば——、人間の内的解体も避けがたいのである」(ボルノウ (1978, p. 130))。

では、人間が持つべき「住まい」には、どのような条件が求められているのだろうか。

世界保健機関（WHO）は「人間の基本的な生活要求」として「安全性」「保健性」「利便性」「快適性」という4つの条件を提唱している。佐藤と浅見はこれらについて以下のようにパラフレーズしている。まず「安全性」は、防犯や交通及びそれ以外の生活環境での危険性に対する安全性（「日常安全性」）と、自然災害に

起因する災害および火災などの人的な要因に伴って発生する災害に対する安全性（「災害からの安全性」）に分けられる。「保健性」は、環境や住宅そのものから健康に影響を及ぼされない、ということであり、温度や湿度、音響、照度、電磁波等の「物理的環境」と、化学物質等の「化学的環境」、有害生物や細菌・ウイルスなどの「生物学的環境」、さらにこれらの因子を総合的に補完するものとしての社会システム全体を指す「社会的環境」に分けられる。「利便性」とは、駐車スペースなども含む敷地内の日常的な利便性（「日常生活のしやすさ」）や、日常に利用する公共施設へのアクセス、交通機関へのアクセス、さらに物流や情報化への対応など社会サービスの利用のしやすさなど、多岐に渡る内容が含まれる。「快適性」は、五感によって生理的に知覚できる要素、建築物の集合の在り方、緑や水、土など自然との共生に関わる要素、歴史や文化、まちのイメージなど地域に蓄積された意味に関わる要素、さらにコミュニティの在り方に関わる要素などに分けることができる。<sup>6</sup> これらの要素は、人間が「住まい」に求めるものを言い当てている。

このような空間を意図的・計画的にデザインし、建てることができるということ、そのためのさまざまな工夫をほどこすことができること、こうした点に、人間が「住む」ことにおいて優れている点が表れていると言える。

## 2. 「住む」ことの時間性：「住まい」に対する親密さ

このようにして作り出された「住まい」に対して、そこに「住む」人は、親しみを感じ、愛着を覚えている。ドイツ語の連関をたどれば、「家 Heim」と同根の「故郷 Heimat」とは、自分にとって親しみのある場所・空間のことであり、我々が世界に対する親密さを実感することのできる場所を表す。これとは逆に、「不気味な unheimlich」とは、我が家にはいない状態、空間その

6 以上、佐藤・浅見（2001, pp. 17-21）。なお佐藤・浅見は「住環境の5つの基本理念」として、WHOの4つの条件に加えて、さらに「持続可能性」を5つ目の基本理念としてあげている。そしてこの「持続可能性」は、物質的な環境において将来的な住環境の悪化を引き起こさないこと（「環境持続可能性」）、持続可能性を意識した都市・地位経済発展を進めること（「経済持続可能性」）、地域社会の文化や歴史性を保全していくこと（「社会持続可能性」）という3つの概念に分類できる、としている（同書 p. 21）。住環境の評価方法に関するこれらの項目は、現代という時代にあって「住まい」に何が求められているか、別の言い方をすれば、「住まい」によって何が実現されることが望ましいとされているかという点についての客観的な指標として理解することができる。

ものに対するよそよそしい関係のことを意味する。ここからも、人と家との関係が、単に客観的な意味での「生活を送る場所」以上のものとなっていることがうかがわれる。さらにこうした関係は、その人の住む家ばかりでなく、さらにその家が位置している場所、地域（町並みや景観、文化、風土なども含めて）に対しても同じように見出される。その意味では、「住まい」は家に限定されない。ここには、おそらく人間に固有の、場所に対する情緒的なつながり（いわゆる「トポフィリア」<sup>7)</sup>）が見出される。<sup>8)</sup>

このような、人と「住まい」との親密さが構築されるのは、そこに「住む」ことに固有の意味での時間性、すなわち、人がその場所で長い時間を過ごしてきたという来歴があるからである。

たとえば、よそから引っ越してきたばかりの、移り住んで間もない部屋は、どこかよそよそしく、まだ「自分の部屋」になった感じがしない。自分のものを自分なりの仕方配置する。「自分のもの」に囲まれて過ごす、自分の居場所を作る。そこで一定期間生活を送る。それによって少しずつ、その空間がしっくりくるようになる。

つまり「住まい」というのは、「慣れ親しみ」という時間性をはらんだ持続的な関係性を実現させるものなのだ。慣れ親しんだ「住まい」にあって、見慣れた光景・勝手知った空間のなかで、身体に馴染んだ家具や思い出の品にとりまかれているというのは、何とも言えない「落ち着いた感じ」をもたらす。他人にとっては雑然とした場所であっても、当人にとっては他の何処とも替え難い場所なのである。

そして同じことが、より広い意味での場所・地域に関しても指摘することができるだろう。新しく移り住んだ街並みは、当初はどこかよそよそしい。しかし、その街に少しずつ住み慣れていくにしたがって、それがたとえ雑然とした街並みであり、生活上の不便さが解消されていなかったとしても、勝手知った街並みは愛着の対象となる。それが生まれ育った街であれば、なおさらのことであろう。<sup>9)</sup>

この点に関連して、桑子は「住む」という経験の重要性を説いたものとして、平安時代末の歌人、西行の次のような歌を取り上げている。

「山深くさこそ心はかよふともすまではあはれは知らんものかは」

これは、「どんなに山深く心を通わせても、住むことがなければ「あはれ」を知ることはできない」という意味である。つまり、「住む」という経験が、「あはれを知る」上で大変重要だ、と西行は言っているわけである。桑子はこれを、「心を通わせているだけでも、実際に訪問しているだけでもだめであって、身体を山間に置いて居住しなければ、人間の感得すべき根源的なものをつかむことはできないということである」と説明している（桑子（2002, p. 10））。

落ち着くというのは、人間工学的な面もあるが、何より「慣れること」、言い換えれば時間性的もたらすさまざまな効果が重要である。それらの効果とは、たとえば、どこに何があるかが身体に染みついており、生活のリズムやパターンと切り離しがたく結びついてい

7 「トポフィリア」とはトゥアンによる造語であるが、これは〈物質的環境と人間とのあらゆる情緒的なつながり〉を意味する（トゥアン（1992）：原書は1974年）。なお付言しておく、「場所への愛」を意味する「topophilia」という語を最初に用いたのは、ガストン・バシュラル（『空間の詩学』（原書は1957年））である。「わたくしはたいへん単純なイメージ、幸福な空間のイメージを検討するつもりである。この方向のわたくしの調査はトポフィリ（場所への愛）の名がふさわしい。この調査の意図は、所有している空間、敵の力にたいしてまもられた空間、愛する空間の人間の勝を決定することである」（バシュラル（1969, p. 32, cf. p. 47））。

なお、バシュラルはこの書物のなかで、内部空間の内密の価値を研究する上で、家の特権的な存在であるとして、家が我々に与えるイメージについての研究に多くのページを割いている。バシュラルの言うところでは、家は「人間の思想や思い出や夢にとって、もっとも大きな統合力の一つである」（同書 p. 41）。彼が取り上げるのは、思い出のなかにある家だけではなく、詩人たちが描き出した想像上の家のイメージでもある。というのも「家は風景以上に「一つの精神状況」である」（同書 p. 108）からだ。このように、家は空間をめぐる詩的想像力において一つの独特な地位を占めているのである。

8 この点は、先に「人間（動物と異なり）「住む」ことにおいて優れている」と述べた点と、密接に関わり合っていると考えられる。たとえば住み慣れた場所に対する「名残惜しい」あるいは「懐かしい」という感情は、おそらく人間独特のものであろう。あるいはまた、「住まい」に対する「こだわり」や「思い入れ」なども、人間が「住まい」に対して抱く情緒的なつながりのリストに加えることができるだろう。こうしたリストは、人間が「住まい」に対して並々ならぬ思いを抱いていることを示している。

9 本論では「住む」が主題であるので、場所については「住まい」のみに考察の対象を限定し、広い意味での場所に関する検討は行っていない。後者の意味での場所については、川崎（2010）で論じたことがある。場所についてのより包括的な研究ということでは、何よりもまずレルフ（1999）を挙げておかなければならない。

ることや、そこで過ごすうちに経験したさまざまな出来事の記憶・思い出などである。

この結果、多少不便だということがあっても、人は慣れた「住まい」に留まりたがる。それは単になかなか引越しをしたがらないとか、それだけではない。災害が生じたときのような非日常的かつ重大な決断を即座に下すよう求められる場面、たとえば津波が迫っている等々の警報が出されたとき、人はむしろ自宅に留まる方を選びがちである。これは、自分の勝手知った自宅がもっとも安全であるという判断・希望的観測をとりがちであるのと、これまでたいした被害もなかったのだから大丈夫という安心感が一方にあり、さらに、大切なものから離れたい・失いたくないという気持ちが他方にある。いずれにせよ、自分がこれまで「住まい」と取り結んできた親密な関係を頼りとし、良くも悪くもそれに囚われているのだ。

このように、自分が親密な関係を取り結び、切り離しがたく結びついている「住まい」は、それ自体において固有の時間性を帯びていると言える。すなわち「住まい」は、かつて誰が、またどのような家族がその家で暮らしてきたか、という歴史をまとっており、それを表現したものであると解することができる。このことに関連して、多木は「生きられた家」という観点から、家そのものに内属するような仕方で積み重ねられてきた時間性のことを考察している。多木が子どもの頃に住んでいた大きな家のなかには様々なものが満ちあふれており、古いタンスのなかに見出される来歴の分からない品々のほか、もはや何のためにそこにあるのかさえ分からなくなっているもの——しかし無論のこと、調べてみればその起源を解説することもできるであろうようなもの——が見出されたことから、多木は次のような洞察を引き出している。

「名づけようもなく、直接読み解くこともできず、またそこになぜあるかもわからぬ来歴を家が記憶しているといってもよからう。／このような意味で家はまさに多様な時間の結果である、家そのものが記憶である。それは私だけでなく、私の先祖たちの痕跡であり、さらに、家族をこえて家をつぎつぎに進化させてきた人類の時間の痕跡が重なっている」(多木 (2001, pp. 210-211))。

ところで、この引用箇所の最後のところでは、「住まい」にさらに別の時間性が含まれていることが示唆されている。それは個々の「住まい」の来歴を超えた次元での歴史性であり、人類学的な時間性である。これにはたとえば、文化・歴史的な背景をもったデザインや間取り、資材、内装等々の違いというのが含まれるだろう。この意味での時間性は、個々の時代において誰がどこでどのようなスタイルの「住まい」を建てるにせよ、必ずやその「住まい」を深く規定する。そしてこのことによって、生活上の振る舞いはもちろん、環境との関わり、外敵との関係、コミュニケーションのスタイル等々にも違いが出てくる。たとえばいわゆる伝統的な日本家屋であれば、室町時代に始まる書院造の様式を踏まえつつ、畳、襖や障子が用いられ、床の間や客間等々が据えられる。ここには、日本に伝統的に構築されてきた文化、美意識が強く影響している。今日ではむしろ洋風のスタイルが広く普及し、キッチンやダイニングルーム・リビングルームなどから構成された住宅が主流となっており、コンクリートやアルミサッシなどの資材が用いられている。一戸建て住宅や集合住宅（マンションやアパート）などの違いはあるにせよ、現代ではそのような住宅が、我々が「住まい」ということで思いつくイメージのモデルとなっており、「住む」ことの内実を考えるときのベースとなっている。<sup>10</sup>

我々が「住まい」のなかでとる日常的な振る舞いの全般、たとえば家のなかでは靴を脱ぐとか、寝室が和室ならばそこに布団を敷いて寝るとか、居間はむしろ洋間にしてソファに座ってくつろぎながらテレビを見るといったようなことは、単なる習慣を越えた仕方で、我々の感性それじたいを規定している。この点に関して芦原は次のように記している。「外から家に帰ってくると、玄関でなんの疑いもなく靴をぬぐ。われわれ日本人にとっては靴をはいている空間は「外部」であり、靴をぬいでいる空間は「内部」であるということが永年の生活の習慣として身についていると言える。そして靴をはいて外にいるときは、ある種の緊張感があり、靴をぬいでやっ解放され、やれやれ家に帰ったという実感をもつのが、おおかたの日本人の偽らざる心情であると考えられる」(芦原 (2001, pp. 5-6))。<sup>11</sup> したがって、それらの日常的で習慣的な振る舞いを大幅に変更するよう強制されることは、しばしば人に大きな

苦痛——たとえば〈あたかも自分の一部を奪われるかのような〉つらさ——をもたらすのである。

さらに、人間が実際に「住む」場面を考えてみた場合には、「共に住む」という観点が出てくるとも、見落としてはならない。これは、同じ「住まい」で誰かと共同生活を送る、ということの意味しているのではない。「共に住む」とは「住まい」を同じくする場合に限定されない。「住まい」は別でも、同じ地域に「住む」他の人々というのが必ずや存在しているはずである。他人といかなる接触も持たずに生きることは現実としてほとんど考えられない事態であるし、実質上不可能である。したがって、「住む」ことは単独で成り立つわけではない。自分の「住まい」が含まれる地域というものがあり、他者たちがそこに「住まい」を持っている。複数の「住まい」がやがて集落・コミュニティを構成し、それがやがては街、都市へと発展していくとき、人間と環境との関わりはさらに異なった様相を見せ始める。というのもその場合に環境というのはいわゆる自然のことではなく、街や都市という人工的な環境のことを意味することになるからである。

### 3. 技術と生

これまで、人間と環境との関わりという観点から、「住む」ことが持つさまざまな論点について考察してきた。それによれば、人間は環境のなかに「住む」とき自らの「住まい」を作ること、またその「住まい」に対して独特な情緒的つながりを持つことについて述べた。このとき「住まい」は人間と環境との関わりにおいて媒体の役割を果たしていると言える。そして、この媒体を作り上げているのが、人間に備わる技術である。すなわち、技術を用いることで人間は環境に適応し、自らにとって安全で快適な、「住まい」という人工的な環境を作り上げているのである。そこで以下では、「住まい」を技術という観点から論じてみよう。

この点について、本論冒頭でとりあげた三木清はその技術論のなかで、技術を主体と環境との媒介と定義している。すなわち三木によれば、「主體と環境、主観的なものと客観的なものとを媒介するといふことが技術の本質に属してゐる」(三木 (1967b, p. 202))。そして、主体と環境とが調和的な関係にあればそれでよいのだが、そうではなく、両者が対立するという場合に技術が要請されるのだ、と述べている。

こうした考え方からすれば、「住まい」とはまさしく人間と環境とを媒介するものとしての技術の所産には

- 10 「住まい」の造りは文化によって、あるいは時代によって異なるが、それと平行して、「住まい」の持つ社会的な意味ないし機能もまた異なる。その意味において、「住まい」は文化や歴史を映し出す象徴として理解することもできる。たとえば次のような記述を参照。

「近代以降、住宅の意味や役割は大きく変化した。近世までの住宅の主要な機能の一つは格式の表現であり、一家の長たる主人の身分表現や接客を第一義とする住宅が形成された。しかし、近代以降の住宅では、家族の生活こそ住宅の中枢であるという考え方が広く浸透し、間取りにもそうした考え方が明確に反映するようになった。とりわけ、近代を特徴づける都市中間層の住宅でこうした傾向は顕著だった。また、住宅におけるプライバシーの重視も近代の大きな特色である。家族の集まるリビングルームと、家族各人の個室から成る戦後のいわゆるモダンリビングは住まいの近代化の一つの結実だったといえよう。／一方、住宅の商品化は住宅の意味そのものを大きく変えた。経済効率のみで住宅を考えることは、スクラブ・アンド・ビルトを促し、地域固有の住宅の伝統や文化を過去のものとして葬り去った。住宅が「時代を写す鏡」としての役割を見事に果たした結果である」(小沢・水沼 (2006, p. 8))。

むろん、近世以前であっても、貧しき故に寝泊まりの場所としての「住まい」を手に入れるのが精一杯、という人びとの方が圧倒的多数だったであろうし、現代においても家が「住む」こと以上の意味を持つ、たとえばいわゆる豪邸がステータス・シンボルとして機能するといったことは、しばしば見られることである。だとすれば、「住まい」がまとう歴史的・文化的な意味の層というのがあり、それが「住む」ことそれじたいを規定しているという側面のあることも、念頭に置いておかなければならないだろう。

- 11 とはいえ、これだけのことなのであれば、単なる風習の違いということで片が付くように思われるかもしれない。しかしたとえば、声原がそうしているように、この事実が、和辻が『風土』のなかで指摘している日本語の「うち」「そと」に関する用法へと接ぎ木されるとき、そこには文化的実存という意味での日本人独特の存在様式が反映されているのではないかと論じることができるようになる。

この点に関する(声原も引用している)和辻の印象的な文章を、以下に記しておく。

「最も日常的現象として、日本人は「家」を「うち」として把握している。家の外の世間が「そと」である。そうしてその「うち」においては個人の区別は消滅する。妻にとって夫は「うち」「うちの人」「宅」であり、夫にとっては妻は「家内」である。家族もまた「うちの者」であって、外の者との区別は顕著であるが内部の区別は無視せられる。すなわち「うち」としてはまさに「距てなき間柄」としての家族の全体性が把握せられ、それが「そと」なる世間と距てられるのである。このような「うち」と「そと」の区別は、ヨーロッパの言語には見いだすことができない」(和辻 (1979, p. 173))。

この箇所が続いて、和辻はこうした区別が日本の「家」の構造に現れていること、さらに、「家」のあり方が日本人の「国民の特殊性」を示している、と論を進めているのだが、和辻の主張の妥当性については改めて検討が必要であろう。



かならない。人は「住まい」なくしては世界に「住む」ことはできないからである。

「住まい」とは太古より環境に適応してそこで生を営んできた人間の技術を集約して表現した具体物にはかならない。その意味において、「住まい」を人間の開発した技術の結晶として理解することができる。あるいは、技術をもう少し狭い意味で理解したとしても、洞穴などを利用していた太古の時代は別として、文明が生み出されていくなかで「住まい」あるいは「家」とは、まさしく技術の所産である。家を建てる際の大工的な技術のほか、電気、ガス、水道、断熱、防音さまざまな技術の結晶である。

三木の次のような言葉は、そうした事実を意味するものとして理解することができる。

「人間はつねに環境のうちに生活してゐる。かくて人間のすべての行為は技術的である。言ひ換えると、我々の行為は単に我々自身から出るものでなく、同時に環境から出るものである、単に能動的なものでなく、同時に受動的なものである、単に主観的なものでなく、同時に客観的なものである。そして主體と環境とを媒介するものが技術である」(三木 (1967a, p. 172))。

「住まい」を構成するものは、設備その他を含めて、すべて任意で選択され、人為的にそこに据えられたものである。デザインや壁紙、家具や調度、生活に必要なもの、あるいは自分の趣味や興味関心からそこに置いてあるもの等々、すべてが人為的なものである。

ハイデガーの有名な区別を用いて言うならば、「住まい」を構成するものはすべて権利上「道具的存在」であり、純然たる「事物的存在」などはまったく存在しない。そこあるものすべては人間がそれを用いること、あるいはまたその用途・目的等によって規定されたものであり、人為的に据えられたものであって、事物本来の目的にしたがってそれ自体としてそこに在るのではないからである。その限りで「住まい」は技術の所産以外のものではない。アリストテレスの言うように、「技術」は「あるとあらぬとの可能な、そしてその端初アルケーが製作者に存していて作られるものには存しないような事物」に関わるのだ (アリストテレス (1971, p. 222 [1140a]))。

先にも述べたように、生きることは、環境のなかに、環境とのかかわりを通じて生きることである。そこでどうしても、所与の環境に対して人間が適応することが必要になってくる。そうした環境への適応において技術が要請され、技術のおかげで人間がそこに「住む」ことが可能になったり、あるいはいっそう容易になったりするのである。

もっとも、その意味での「技術」であれば、あらゆる生物において共通して見られると言えるはずである。たとえば昆虫や単細胞生物にも、環境とのかかわりのなかでそういう性質があるにちがいない。キツツキが木に穴をあけるのは、木の本来の在り方とは相容れないし、ビーバーが巣を作るのも同じである。これらはすべて、環境それ自体が持つ意味や目的とは違った仕方で活用することに他ならない。そうすると、「住まい」を生み出す技術という観点からは、人間と動物の違いはどこにあるのだろうか。

ここでもやはり、ポイントになるのは「世界開放性」(シェーラー(2002))である。動物にとって技術は本能の定めた範囲に限定されており、意図的に発展させていく余地が乏しいか、あるいはほとんどない。これに対して人間は、技術を意図的に生み出し、利用することができる。そしてそれによって可能になった事柄が、さらに新たな技術を要求し、実現させていく。これはテクノロジーという意味でも、身体の使用という意味でも成り立つ。与えられた状況、現実の文脈をこえて、技術それじたいを目的として活動することができるのだ。そして技術の方はといえば、それじたいとして自立した世界を生み出し、増殖することがありうる。もともとの意図を越え出たり、はみ出したりして、技術の発展や革新そのものが自己目的化する。「できそうなことなら、実現させてみよう」という力が働くのである。

技術は人間にとってあくまで付加的なものでしかない、と言われるかもしれない。しかし、我々の現実を見るならば、いっさいの技術を取り払った在り方というのは、もはや考え難い。たとえば、人間は生を営む上でさまざまな道具を用いるが、その使用は人間に備わる何らかの技術を前提とする。道具とは媒体・手段であり、これを創り出し、使用・活用し、洗練させていっそう高度なものにしていくのが技術である。

古来、人類は「道具を扱う動物」と呼ばれてきたが、道具を技術の媒体と見るならば、これは、人間が太古

より原始的な技術を用いて環境に適応し、あるいは環境を作り変えてきたという事実を示している。そしてこれらの技術は本能として生物に備わっているものとは異なり、それ自体として発展させ、洗練させていくことで、さらなる技術の開発を準備する。<sup>12</sup>

そこで技術を、環境との関わり方の改変として理解することができるだろう。技術を開発し発展・洗練させていくことは、人間にとっての環境を再構築することでもあるからだ。

さらに、技術によって周囲の環境を改変させていくと、こんどはその環境に合わせて人間が自らの行動や振る舞いを変化させていくようになる。こうなると、技術が人間の生を規定する度合いが強まっていく。その意味では三木も言うように、環境との関わりを通して人間が自己を作り上げていく、という側面もあるのだ。<sup>13</sup>

本論で取り上げてきた主題である「住む」ことに関していえば、当初は環境に適応する形で住居を建てていたが、やがて技術の進歩によって、極寒、灼熱の地や、さらには宇宙空間にも住むことが可能になっていく。そうするとそこは「居住可能な地」ということになる。これは人間にとっての「世界」を技術が拡張し、可能性を拡げたのだと評価することができる。

むろん、技術が作り上げる世界とは、純然たる「自然な」環境ではなく、人間の刻印が押された人工的な世界であり、そこには「自然との調和」を逸脱した、という評価があるに違いない。人間が作り出した新し

い環境というものがある。「住まい」というのは元来そうしたものの一つでもある。

現代では「住環境」という言葉があるとおり、「住まい」は人間にとって新たな環境として理解されるようになっていく。そして、近年、とりわけ福祉的な観点から、この「住環境」の改善が重視されている。そのなかで、技術によって、住居の在り方をとりわけ高齢者や障害者などの社会的弱者にとって不便でないものへと改善させていくという取組がなされているのである。こうした取組にあつては、「住まい」を人間にとってよりよいものにする技術は、単なる便利さ・快適さの追求からさらに、「善く在る」あるいは「善く生きる」の次元へとつながっていく、ということが見られる。すなわち、ここで技術は倫理の次元へと接続されているのである。たとえばバリアフリー住宅といったものは、行動面における個人の自由を実現するという意味においてだけでなく、さらに、社会的公正の実現という意味において、重要な取組であると言える。<sup>14</sup>

#### 4. さいごに

以上、本論では、人間と環境との関わりについて問い直すことを目指しつつ、「住む」ことに関して考察してきた。その際に我々が論じたのは、人間にとって「住む」ことの意味であり、「住む」ことの空間性・時間性および人間と「住まい」との独特のつながりであり、

12 したがって技術はそれじたいにおいて歴史的な性格を帯びている。三木は技術の歴史性について次のように書いている。「すべての技術は元来歴史的なものである、歴史は形の轉化であり、技術の歴史は技術的な形の轉化である。一つの技術的な形が發明によつて完成されてゆく過程には無数の變化があるであらう。その變化を通じて一つの理想的な形が現はれてくる」(三木(1967b, p. 257))。さらに三木は、個々の技術が生み出すさまざまな道具間の連関ということから、マンフォードのいう「技術複合体」という概念を介して、技術が歴史的のみならず社会的性格を持つという重要な指摘をしている。「技術複合体」とは、マンフォードによれば、技術に関連するさまざまな要因、たとえば時代や地域、資源と原料とを利用する傾向、エネルギー利用・エネルギー発生手段とそれに固有の生産方式、労働者のタイプ、社会的遺産等々が作り出す一連の關係全体からなっており、どの部分をとり、その複合体を構成する一連の關係全体を指し示し象徴する、という關係になっている (cf. マンフォード (1972, pp. 142-143))。ここで三木から我々に委ねられているのは、そのような道具の連関、あるいは「技術複合体」がどのような背景のもと、どのようなプロセスでできあがっていくのかについての解明である。これは、そのような連関ができあがってくる個別的な領域や部門を見ることによってしか達成されない。その点で、「住まい」というのは一つの着眼点として有望ではないか、と思われる。

13 そして技術に関していえば、累積的な側面と、忘却にさらされる側面とがある。人類がかつて共有し自明のものとしていた技術のなかで、今日では失われ忘れ去られてしまったものの少なくない。たとえば古代の建築術や、磁器・陶器などの製造術等々は、現代では研究による解明の対象になってしまっている。

14 いわゆる「バリアフリー建築」がアメリカにおいて、1960年代初頭以降、どういった思想のもとに法的に整備されていったかについては、たとえば萩原(2001)の第一章「バリアフリー思想の醸成」などが参考になる。

15 むろん、技術が多くの場面で人間にとって有用であるとしても、技術がよいものであるとか、技術はそれ自体において価値中立的である、と言って済ませるわけにはいかないのも本当である。現代ではむしろ、たとえば技術が人類に対してもたらす破壊的な影響を告発する、といったような、技術の否定的側面を強調するというのが支配的な風潮であるようにも思われる。とはいえ、技術に対する倫理的観点からの検討ない批判は、「技術」全般を相手にしている限り、アンドリュー・フィーンバークのような数少ない成功例を除けば、スケールが大きすぎて漠然とした議論になってしまう危険がある。そうではなく、実のある議論をするためには、個別的なテーマにおいて技術がどのような形で現れてくるか、そこにどのような問題が発生しているか、さらにその問題がもっと大きなスケールの問題のなかでどのような位置を占めているか、を確認していく必要があるように思われる。

人間と環境とを媒介するものとしての「住まい」＝技術であった。人間はこれまで、「住む」ことにおいて、「住まい」を作るという仕方、自らの「住む」環境を改変し、それによって快適さや便利さを手に入れてきた。これを可能にしたのは、人間が発展させてきた技術に他ならない。<sup>15</sup>

この点に関して、本論冒頭で述べたように、前世紀後半以後いわゆる環境問題が問題として浮上してきたことの背景には、「住む」ことに関連する人間の連の営為が少なからず関わっているはずである。そうだとするならば、現代に生きる我々に求められているのは、「住む」という営みに関する態度の変更でもあることになる。我々は「住む」ことによって何を求め、何を實現してきたのか。また、「住む」ことが、とりわけ技術の問題に関連して、実際にどのような問題を生じさせているのか。これらの点について具体的な事例を検討しながら、いっそう包括的な観点から考察する必要がある。今後の課題としたい。

## 文 献

- 芦原義信（2001）『街並みの美学』、岩波現代文庫。
- アリストテレス（1971）『ニコマコス倫理学』（上）、高田三郎訳、岩波文庫。
- 小沢朝江・水沼淑子（2006）『日本住居史』、吉川弘文館。
- 川崎惣一（2010）「地理的存在としての人間」、『釧路論集』第42号、北海道教育大学釧路校研究紀要、1-9頁。
- 川崎惣一（2012）「人間と自然との関わりに対する三つの自然哲学的アプローチ——シェリング、レーヴィット、メルロ＝ポンティ——」、『宮城教育大学紀要』、第46巻、31-44頁。
- 桑子敏雄（2002）「感性と『住む』の哲学」、日本感性工学会感性哲学部会編集委員会編『感性哲学』第2巻、東信堂所収。
- 佐藤由美・浅見泰司（2001）「住環境概念」、浅見泰司編『住居論 評価方法と理論』第1章、東京大学出版会所収、pp. 3-30.
- シェーラー、マックス（2002）『宇宙における人間の地位』、亀井裕・山本達訳、『シェーラー著作集』第15巻所収、白水社。
- 多木浩二（2001）『生かれた家 経験と象徴』、岩波現代文庫。
- トゥアン、イーファ（1992）『トポフィリア 人間と環境』、小野有吾・阿部一訳、せりか書房。
- ノルベルグ＝シュルツ、クリスチャン（1973）『実存・空間・建築』、加藤邦男訳、鹿島研究所出版会。
- ハイデッガー、マルティン（1998）『形而上学の根本諸概念』、川原栄峰・セヴェリン・ミュラー訳、『ハイデッガー全集』第29/30巻、創文社。
- 萩原俊一（2001）『バリアフリー思想と福祉のまちづくり 建築と福祉の融合をめざして』、ミネルヴァ書房。
- バシュラール、ガストン（1969）『空間の詩学』、岩村行雄訳、思潮社。
- ボルノウ、オットー・フリードリッヒ（1978）『人間と空間』、大塚恵一・池川健司・中村浩平訳、せりか書房。
- マンフォード、ルイス（1972）『技術と文明』、生田勉訳、美術出版社。
- 三木清（1967a）「哲學入門」、『三木清全集』第七巻、岩波書店所収。
- 三木清（1967b）「技術哲学」、『三木清全集』第七巻、岩波書店所収。
- ユクスキュル、ヤーコプ・フォン／クリサート、ゲオルク（2005）『生物から見た世界』、日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫。
- ル・コルビュジエ（1967）『建築をめざして』、吉阪隆正訳、鹿島出版会。
- レルフ、エドワード（1999）『場所の現象学 没場所性を越えて』、高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳、ちくま学芸文庫。
- 和辻哲郎（1979）『風土』、岩波文庫。

（平成24年 9 月28日受理）